

父の残した木材を挽く

「もう仕事らしい仕事はしていないんだけど、ずっとここに通ってた」。星製材所の作業場で、利安さんは笑いました。集合住宅から戸建ての住宅へ、避難を続ける間に亡くなった父・利男さんが大事に残した木材を削り直しています。家具作りについて聞くと「家具という程でもない。台です。ハハ」と利安さん。「何かしてないと、おかしくなっちゃう。飯館に来て休んでいるわけ」。作業場にいると、知り合いが次々に立ち寄って行きます。

昨年移住してきた人が趣味で家具作りをしていると聞き、作業場の一角を時々貸しています。屈託のない利安さんの人柄が、新しい人も呼び寄せています。

そして今年、製材所裏の実家に使われていた木材も利用し、小さな家を建てることにしました。「製材した木で村の大工さんに建ててもらうんだ」。避難先を引き払い、夫婦でここに戻って来るそうです。

星製材所の宝物

星製材所の近所に暮らしていた方から、「星さんは移住してきた人と一緒に家具を作っているみたいだよ」と教えていただき訪ねてみると、この場所を大切にしている星さん夫婦の笑顔に出会うことができました。



星利安さんと妻の篤子さん(伊丹沢)。製材所(上飯樋)の作業場で。



気さくな星さんと打ち解け、製材所で趣味の家具作りをしている小野さんと澤田さん。右の素敵な棚も自作です。



木目の美しいテーブル。避難先の自宅には利安さんが手作りしたテーブルや棚がたくさん置かれています。

特集1 広報に届いたエピソードから

「広報いいたて」は、毎号たくさんの方のご協力をいただいて発行しています。快く力を貸して下さる村民の皆さんには、いつも感謝でいっぱいです。今年度の取材の中でめぐりあった情報や、広報担当に届いたお手紙を元に、日頃の感謝を込めて、4つの話題を紹介させていただきます。



地域防災センター駐車場の側に建つ『飯曾小唄』の歌碑。建立時は旧柔剣道場にありました。



平成22年の飯樋小学校運動会で『飯曾小唄』を踊る児童。手の甲に花を付けて踊ります。

飯曾小唄

昨秋の飯樋四区復興祭で『飯曾小唄』の踊りが披露されると、地域の方々から「運動会で踊っていた」「懐かしいなあ」と言葉がもれました。「残したいよね。広報にも載せてほしいな」。そんな声にお応えして、『飯曾小唄』にまつわる物語をお伝えします。



飯樋四区復興祭で踊る保存会の皆さん。小学校に教えに行っていた方が誘い合って練習。踊りを披露しました。



芸能発表祭で『飯曾小唄』を歌う歌手の藤田征人さん(右端)。CDも制作しています。

世代を越えて思い出をつなぐ大切な唄

「伊達へおりよか 相馬へ出よか
いっそ飯曾に 駒ひきとめて」と歌い出す『飯曾小唄』が誕生したのは、大館村と飯曾村が合併し飯館村が誕生する前年、昭和30年でした。当時の飯曾小学校に勤めていた成田真先生が作詞を、遠藤傳校長が作曲を手がけました。

唄は地域に愛されて根付き、およそ30年後の昭和59年には歌碑が建立されました。除幕式には約300人が出席したそうです。歌碑の背面には由来が刻まれ、「飯曾

郷の四季折々の自然風物を乙女心に託し」描いた歌詞であり、故郷を離れた人は「望郷の想いをこめて口ずさむ」などと記されています。文面に、『飯曾小唄』への深い愛着が表れていますね。

合併後、飯曾小学校は飯樋小学校となり、『飯曾小唄』を継承。唄に合わせた踊りを運動会などで披露してきました。そして今、震災によるブランクを乗り越え、大切な唄を未来につなこうと、故郷の人々が『飯曾小唄』に想いを寄せています。

